雲岸雜志

三

和書門
類
二〇七九七
號
六〇
函
九
架
四
冊

内閣文庫
和書
類
二〇七九七
號
四
冊
二二
函
一五
架

漫筆雜考

内閣文庫
番號 和 20797
冊數 4 ( 3 )
函號 212 238

国立公文書館
National Archives of Japan

雪萍雜志巻之三

柳里恭

浅草文庫

○ある人茶を論ひありとのふことを利休は問ひ一時あまたの人々
ものの友よりの聚と云ふこのかりの客を招きて一時刻を遣
たりしとそこの刻限なくなりて行きたるは門ある潜り戸
けなほ立を掌を上は箕のごとくあるこゝを表とし土を重ねられ
いかにおくそのうへはのりてつくんこまるれば地乃土くえて穴は蔵
たり穴乃底は土のねり上たるが中へとこれバとりあへず湯あとし
て再びつりをを人々の興ありこゝ此すうねて朔明といふ若山幹へ
おハさバくとさやく乗よりれがこと主のこゝろばひをとまる
ねて知りこゝとて穴は蔵ざんを表ーとむるーくすることのかい

ホさホ文と有りつて落ちうめ板こそそれ用の無とそ形ゝゝう菓ハひ
たすゝよへ法ゝふこふもあゝねど賓主ことそよ応ゼされバ菓の原ウ
あゝゞといたまゝ

○

板野意仙といふ医師豊後の国より来て一休禅師に会ふよう
なひあゞゝく大庫もホ居ゝころ料理の才菓子れ才子どころ場あ
まゝまゞ時ゝうゝ禅師よあゝうゝ七ゝの老性質放逸ホゝ菓
の事よくハゝざるが禅師常ホ化より拈をゆゝひゝう附ハ種新の
ものと一ツ器よおゞ〳〵食ゝゝをそて何とゝ料理の調ゝう
ゆれとさやうホ手下ホハゝゆふゞと必ず禅師ゝゝひゝく邪正ハ一
ぬ命り飲食ゆゝ善と悪と形ゝとのゝまゝに意仙ハゝけゞそゞ
ゝくいゝやう禅師ゆゝさもあゝゞゝゝれゝハ志偏ホぬれ形りや

○

ちう調味のゆゞよろゝきゞとヤ生ずゝの浮ハ去ゆ考ホハさう
ゝどゞ

東野ゆ佐川田義ハゞのと〈今日の乃書簡ハ雪のとあきゝをゞ
乃迷惑ゆとあゝ返事よ

聊常ゆゝゞ伝ゞを昌優ずハ月宅とのゝ拾ホよめゞ伝れど
雪ハさゆどホうゝ不ゆひ人ゆ多ゝきこそれゆ宝ゞり雪ふう
きホゆゝハ吹雪ホゝまれゝどゝてこゞゝ死ぬゝりの多ゝ
とあれハ恨びおどるゆどよハあゝれずハ来後の旅よ由井とい
ゝすゝに着ゆゝ拾ゝじめて雪乃降生ハばよあう
あゞめよハのゆ箱根のゆゝゞ山雅ホ嶺乃三雪あゝうん
東海乃候松ゝこゝふよ着ゝゝ附家のあゞれヤゆこのゝろよ

是天龍川ハ流く十五里ヲ下ど山より入る所を信濃乃玉のさ
ゝいあるゝ所をひの地より来ると呼ぶをろあり又此地より人
の行ふ道きとゝろハもあくゝ道ハ玉の焼ハ蔓の蔓ゆて長さ
五六千尋もあくんとあり山ヲどの機をかけうゝ所の者ハ来九の
機と云ふ中せまくしく行くあまへ月ゝこゝ竜きあるゝだろうか
まゝ道の地へ行くくものとてハいと柿形ゝ祝の世ハ来九へ
行くゝとのあるゝど呉服あのくゝ所ゝとゝろのとゝろ行きく
足くゝるゝもるきよこの南北下男好事のゝ所まく来九足て来ゝ
んこゝ来バ〜の眼をゝひくゝゝこゝ行くゝゝの地ハ家ゝ道ゝふ
四ゝ行ありて農北業をすれゝゝ常の食ハ米ハ稗も食ハで
稗ハあゝきをまくへく粘ゝ所ゝこの男ゝ行くゝ家をゝの中あも



ちとゝゝゝゝ者ゝく麻の織ゝゝ尾花とゝれゝゝ新しき枕乃抱
と出して着せゝゝのくゝあくゝ表ゝゝの北を家のあゝとかし
抱ハ木の角おゝをりて即しあゝ
巻ゝて四ゝ分ゝゝゝゝゝ足ゝ
ゝ北ゝ男行くゝ足ゝゝ形ゝ岨北ゝゝあゝ形の屋
世しして激すゝ表ゝのいさぎよ紀ゝひいゝべくもあゝ浅ゝゝ
ゝてゝゝの大さゝゝくもあくんとあのゝゝの抜ハ色紅ゝて
美をおびゝゝ巻ゝをゝゝと笑ゝ反北ゝのあ玉バあゝ乃悪
さゝ事内の人ハ木北美をいぐきたりさくゝゝふやゝ巻の大さ
いゝより足ハバさゝどゝもあくゝゝ北川の来屋とゝふゝゝゝよゝ乃
美のちりて流北行ゝゝを抜ひ〜ものあり美ゝの足ゝ一尺余も

あるべしと思ひ立てゝいくあるを未だ見ようとゝく知る人かゝる江
の出人ハこれと京九の牡丹ゝこゝ〻を拾あつゝふこれ此ゝ人を
やきうふとあるゝこの地ゝもいくまでこの家此ある後人見ぬやき
て見ゝる人ゝ〻ゝそ舟筏も通ハざる地ふゝ〻人の用形きゝ
ろ見りゝ〻ゝ四五軒の家ある中ゝ書ゝ見やるりの〻家々も院
家きて仏壇と無ゝうゝ此面倒ハ一角宗の志角光明の弥陀ゝひ
しき大いゝるゝこの家ゝ食和のゝと供へ打とゝもゝ〻燈明ゝ
器をゝ角ゝるゝとゝゝ〻打ゝ燈火かゝ炬とりて業と形ゝり土人ハ
ゝゝ趣製ゝゝて男女ゝゝるゝよれゝゝ〻ゝ〻ゝ子供
も皆趣製ゝゝ衣類ハ麻のあゝきを織て尾張藩の旗ゝ〻
ゝると考ゝゝ夜も考ゝゝふかの男淫打へゝゝのゝゝて泊ゝ



ゝ家あるゝふ祝ゝて祝ゝ〻ゝでも化ゝゝゝのゝ用と考
どゝこの地ゝ用形きゝ此ゝゝゝゝゝ家ゝゝゝゝ好ゝゝあ
らゝ米ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ家ゝの機ゝ
人ゝ送ゝゝてゝすゝゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふゝゝゝゝと家のあゝふのゝゝゝゝゝゝ海山遠谷ゝゝゝ
ハゝゝゝ地もあゝゝやと世ゝゝゝゝゝゝゝゝ
掛子の夢ふ云遊ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ乎ゝゝて見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ涙むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
所帯の歳ゝ云天下ハ一人のゝゝゝゝゝゝゝゝ
別帯ゝ一人の別帯ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○味噌制し正成を二菜を戒む

男女おのおのまくし汁をくべ茶を入るる筆さしたる絵よ記をしろ

の世乃中や思をとすまぬ者どあるべおりしろ孔妻女や宅のち

らぬ石ごゑまゝ地をしろ孔汁りまやかろこぐ孔ぬ者ど神

○紅葉の羽よ人と契ゝ岩ゝ千ちぎりて末ゆげよとこぢ葉と孔よ

為き者おろく濃き者とちとの まくん

○俗り孔羽木茶ハ爲のるゞ ますもく紅ま尺ゝ毛とろ人柳ハ風

ふとまゝよ強ひく緑いよゝ

○毒用の重箱ハ巻きあひとも費ゝゝゆとむ主でも秘めおきく

日ゝの朝ふまゝ毒ず毒蓋の妻ゝ多く財ともとたゞして歩すす

まゞ也家とゝのふ呂ゝふるらゞ美味ハ高盃ゝゝ ゝきもの

○ふあゝ乗ゝこゝ者費ふゝゝ不用の毒孔よりと考ゞゝ

夏日の七快

○湯あゝて桜と搖る掃除者くお水ゝ者る 枕孔紙を新よ

ゝたる 西を玉ゝ月のいぐさゝ ふとゞゝ炉乃ゝる 浦き孔

○孔よ魚孔ゝこたる 月のゝゝ

鍬風乃十法

穂を西ゝ 労をゝ孔ひ 夏をゝ子主ゝ 聲とひゝき 気をゆ

ゞゝゝ 病城さけ 毒を解ゝ 人と祝ゝゝ 縁をむすび

人書を延ぶ

○古人罰酒の法あり盞を飲敗孔限りゝ孔ゝ この法を失ふ時

者敬を孔ゝ 矛を上す 箕子一たび青く 延齢の言葉と書ゝ

二度ゐめてんと援すの媒とおぼろきことゐありて亦家我失ふ
の業を修ふ労ゐく憂ひ形骸飲べくば

○

世よ久幸もまく差郷ともさゐで習ひはぐる者の書ることを
感ゐることゐ多くと僅すゐどのとハ形きのぐく落命の人は
書くるゐ此夫すづく感慨ゐことえ雖きと多くう暢の才明ゐ才丈
況嵩の美好ゐ法ゐ茅こゐかひとたびハ蓋しく世のあり
さ奈を修くく牙を顧こくる人こゐれど繊くくるものどるゐう雖く
めぐたく書ゐこくるぐくうゐくハよろづやきよ通ぐべ

○

幼きゐれゐて接びよ風接とゐふこのありこれ何人のよくこ
ゐようあくゐん登ふくのぐくる時ハくだくゐだまくゐぐる時きの
ゐるく端書くく



すがくゐる竿よ手ゐくを接くきまくくおのれ動と物ゐ接ゐ
こゐあくこれ奇の言を言ふゐ人ゐ一生の動形牙をよく詠ぐう

○

竿ハ業ゐくく接ハ天地のゐよありて風を牙を扶くるの気こ
世よあくく人零蓋ゐくる人れゐくに形くこくよ活れこくく
市ゐひきく境気を要ふ時世よある人を境鏡を要ちんとふ
要こ蓋の人ハ境鏡を要くんとたぐひよいび争しぐ強よ零蓋の
人よこ接ま境鏡を要くゐ時ゐくぬさて尽すぐくのゐどさふく
よ世よある人のこゐくハこれゐと何とく鏡のくまきをすて
鏡のくゐくぬを要くるやとゐんぐ要蓋の人こくひて今日ま
そのことよりを都ゐ一の響応ゐよりくるる形れバ強ゐくしぐ鏡
ハゐゐと礼どく幸ゐ美味我食くくゐる人のくゐくく食ひたちふ

そのなり刃を常にうるほひを含ざれバ鋒乃味ひあしかるべし
なり
人の信ハおのれが信を以て引出し人の偽もおのまゝがいつわり
より引おこすもの也偽りも遂るときハ信となり信も遂
ざる時ハいつわりとなれりさまでずて嘘も誠もおしなべて心に
ありて己まと向ひて人に嘘あるとてなくおのれ嘘ありて人に
誠をいるべからん此人ちしくまがりしき八人の轡ひとつなり兼
好法師ハ迷のひとつおろかしと書けれども表にいづると
あまりバおそろしとのどをおそるゝに足らずしく捨やすし轡たん
に向ひくあるを所謂心きが身に捨がたしうまずおのれを内に
あれど色外にあらハるゝとなり志ハ本まで善あられまじかり

のうちにありてよろづあしくハなるとぞよしなまりたれハいふ中
にも虚実は根ざしともにその中にあるべし刀をおかのなかなり
がね礼焼刃に刃がね残りけておあげるハとぎなくその切あぢ
あがねのよきもあしよをまてもおあがるなりなかも刃治の心
によるなるぞ十本のうちに一本あるかなきかなりとぞ
木曽義仲の臣畑六郎左衛門ときころ人のむすめにちぎりて
娠らんとせしにその女を飛騨の山住みして挑具の木地を挽け
るものゝ子なり女の母おさへて云いやしき者の子なりて待まず
なりしに武士の妻となるべきものなくハあしく育ぐる人なりけり
とおぼつかなくおもひ待ればひそかに辞退なるなりといふ
に嫌の人畑にこのよしをいへバ畑言無まで兼小身や先に不足におもふ

のひ女とくれざるやと云ひりなどぞその母まことこころにくく嘉永年
老ぬれども彼よ秋りぬる人ハあるひ武士のあるひ工も烟屋の計
死ぬべきまでなりぬひたる時あめつちと祝賀へ入り侍るやうある志あるも
武家へ嫁しまうさくれ和りきまことり侍る形りとあまぶこころた
ぬつその行を成じ給へもかくても書とせんとて終まめとり借老
の契りあさうざりしづ元暦の乱より平の立てうどぞ変てこ
れ孝源谷ハ飛入りて果てまことぞ
あるる商家の者名人武家れ下部といさろひしくく下部を手掛しく
いさろひよ縁うとくく又もよて自負すると変て主人大いはいきど
ろり悪くこうはけ亜しまと人といさろひするのこ形ずず下部うと
も武家を名の人ハ世を渡りぬふるぶくの召仕ふこと下の役びとか

まおのまこを商人の手代私渡世れ生ずるるかとりて武家乃
召仕ふ人といさろふこと石屋れ形りこぶ商れよかハぶる者形まぶ
ハ今ひとぬとうこれたりありとくこびたれども実ハれずしくこの商
一引ふこうしぬ
天の原を満ちとうきくぶるとろを補ひ地れ原ハ盛ふこと
あうを減しく衰ふ和を扶乃系類こかハ暴抱を生じぬまぶる
人元ふく飾るぶ名ハ美麗と形るされバ貧を幸ふり多めるる集
むるぶ原形りあうむこハ物を浮らすれり天地ハどころることを嬉
ふぶ名ハ万教をこれ保しくあぶくくも止めずるれどぶるの
凶年と形る洪水地震大風大雨火災人ハ在りても寒暖侍浮ハ
ふこして百病を生ず易ハ云財宝を倉ハ納めくまくぶるれ見

八盃人は奪ふことを数々多し仕様〳〵美彼と善〳〵ぬる女八家
と犯せといふひとゝ行り情まずんばあるべゝず
法華の異門つ事に学達の句合あり元禄中は五月五日年
中仕五つ過〳〵とのふ句あり何柴の大納言殿〳〵めきれて何り社の
ヤ〳〵ふうあの句社ぬ〳〵と言ぬ〳〵と行り上る射言る檜柴そのやう
里あゝとのよ閉ひ生ず彼あゝ村出ヤたる句あり〳〵と
てロボ〳〵の使の清見とのひてを〳〵京へも出づゝとのあんまを
多〳〵紫〳〵とのことも五ひとあり〳〵の村出ヨボ〳〵衣
へおで〳〵言ねまい〳〵すふ左あゝ〳〵童ひゝ〳〵おゞうせんゝ〳〵一角へ
直〳〵ぬ八生ず村出ヤ風流の面目要のうへまでも変えんとこそい
とまりがゝれとなまあゝする形りと云ふ大納言を出社ヤ多〳〵



ありてさゝ言ねふふ年中の五といる転句のおゝ〳〵れ
五ゐる〳〵ふ元句をを安〳〵ゝ伝ヤず達ヤたりいるゐる有事
やゐ〳〵〳〵ヤセ〳〵ゞとあり生ば村出ヨボ〳〵衣〳〵ゝ有
事とヤもれたゞ只五月西のきのふを〳〵りふふもふを法げけ〳〵あ
すも又〳〵除〳〵〳〵ふバ一年の五もこれ法のさゝだれよりあ
〳〵ぬつきとふれれんより中〳〵る外ヨ不存あゝれりとヤ生ず
れを〳〵〳〵ふ〳〵おゞゐる形りとヤ〳〵〳〵〳〵村出ヨボ〳〵〳〵浮言撞
いで〳〵いるゐる出事ゞと言ねまゐ〳〵ヤれバ大納言の作ハきう
とゝ〳〵ハ磨ゞおりひ〳〵とふ遠了青西ハ四時のこゝ五のさまい
ろ〳〵ふり〳〵ゐ五事ゐの芝び〳〵きふゝ〳〵五社々だちハたゞ
へ林の西社をのすゞきまゝ冬の五社言きふゝ〳〵ふたりこ

のとやうきねぐらうまあまばられとしりうかみやとやうしうる
孫侍れどる左そ形くて西の只今者とのく能まくこと有比
奥くハおゆひ侍りぬと仰られ〜
とゝかの山のおあうよ中留おとつる里あり紀氣するとろおうら
しこ貴堂〜つうふ紫垣藥まつみやひめぎうして家の家さうう
に出の音あぐたぐ形くずおりしろく覚え久まぐタくれともいそ
ぐぐ春形ず月またどうあんと接おくふく行て足るに子まく
結ふ兼あり云よしあるくんのかれ侍よやとづくく床几と乞ふあそ
のさ女いやしうるぬ尼のたぐこれ火形く拾出く門入りて体ひぬ
へ京よておのすやあどねどろふいうるものごれ表ねいあくで
あくぐおうくんぞうく世とのどやうまるくあうころ易常のうこともも



おどうぐ〜わうあど御じゆうまやと唐れをぐれうる茂と惜め
ぐいかとよきやうふ世とおりしろくるる分よはあぐ見くふうれ
そふ吏のちろざ〜あ〜くくこと書よ閑れく拾ま見こる分形り
女のこきわ二人れ吏と拾ざるを点ちれとの見ぐたぐよとあぢき
あくくるひすてくこの分とハありぬとくわよ見ぐ侍ひするふこのち
の果寂と養してみるよハあぐ蝋の城を れ里のちよ縁あるを
のてこあふをるありわうくく来ままぐよりて舞ひのくくくふふ
何と形くやうきとろうあまぐ墨筆をうりぬるよそくこあよこ
ぬぐ藥おの経冊あくあれよ書てのうくとく出くル墨ばうちく
のまくるふをの飛くる結あくぐ人のあうくぶきのくも見ざ
まれどもなくく書夢のて書て侍ろくく侍りぬ

○

うめく濃き色もとしの山風ふきとれるごとく吹すのこぢ葉

○

借用さぶらふべき金の多きも奪ふべくとは義房の詞にて

借銭の多き銭苦ゆやむことのあまたでも借銭より先この銭を大

借ることは世人銭乃利と申されて天の理とおろそかに借銭何ぞ身を

忘れ仕弱あるんや理を帰る舟ハ乗れ身をわろぶ

此間の業とくく思遣あるべきこと

ところ是ハ彩ろるふこと世く彩く来のあれぐうする席よ和ハ涙

まるるあやとゝぶるるハ和ハかどきくひあくとゝ何とくく有

がきとと煙ひまぶとゝぶ世ますぐく和ハ書く

人ぶどゝ方引市と拾りの彩くて身不拾ふく家産を彩くる

この多くう有ふまやうあるとハすくもいさぶ呂家業大切まつ



ゑて金銭多くたくつるより外のをハいくゝやさぬんなあり

といふ事まくと云左あくハ書状を紙筆又送状あるひハ関和を形

彩中形おまでもあくゝ又来久人も侍状あるくく再用くもふやと

ゝぶを主人ゑひてゑれハ昔よりあり来事くゝ法形式ハ何ひとを

くく用ひぶるとあくくとゝふあまくゝ法ハとと何人の姫ありおき

たるぶとゝぶハ左やうのむづくくきこけハなどやさぶるまハ雑人ゝよ

てを知り侍ふるとあるれふくく事ハ渋べきありこのふ事又云

ふるる又の侍ふるとあるとゝ今書を法ゝ人く

その法ハたそり左すれハ法家をゝの人家を修むるあり事

ありて成就す和ゑの尼書れ尼何ぞ修家育家の害ありと

いとんや初ハ若のんなあるべきかりとゝ主人ゝを家て法くう

学問して博学多識となるとも人情を察して世務に行とゞかん
が為なり聖人賢者の世話やきなれども言つゞまりて知者の類ばかりのと
の義にはあらず然れば理にあきらかなるとて人を俗物と見下す
也かく謂る俗物此目より見れば老まさに高慢なる者は角立て主
て無益に見やられり君子は時に随ておもしろくてよく俗とゆめぐ
はるゝやうなるが也君子俗物に交りつれど其心にやはり俗物なり学びの
道は粋となるざまにて習勝りなれば書籍は粋となるの助けなり
まずと知りて表へあらはさで隠しおき入用の時につかひ可ほこりが
なるは人ざらに用ひざる所なり
人に饗応せられたる物をうましとおもひ家へまでこしらへ食する時
は外にて食しける時よりは味ひうまからずいつわもとなましへばおもひ

またうまく食ふが為なり食をむさぼらずして食するものにうまし
といふありされば粗食たりともうまきはおもひよらざる所にありとす
べし食はうまし・まづしといふを知しその時と處によりて口中に
應じて口にかなひたるよりうまきはなかるべければ空腹には生塩
も添つける湯漬も山海の珍味よりもうまし諸の道も志なり
初に筆をとることを望む人あまでも写しおほすべき格別筆勢
墨色すぐれずとも手よるるとなしおのづから発せし勢ひふくらび
なるひすることとありがたし
予江戸におもしころ武甲山にまうで日本武尊の旧地を拝
せんと秩父山にゆく人にまかせにともなひまう書く村より御
嶽山に登りけるのあぐり雨平にころ平乃格子が鎗崖多

○

をすぐ〳〵古戦場とぞ尽しるべする社江戸の人ふ〳〵てあこの
あさりの春秋〳〵と云り
武野古戦場記ハ云武を出あり嶽社ハ義して神威を示
平の初ふ志あ〳〵久と繁氏の際ハやうこげ法を示衆乃仁政
ふ志きゑるむさ〳〵の玉瓜嶽の山ハ叔倉子義を遠国漂有樹の
春秋乃里まで江戸と云ること十有二里ふして初孫ハ山河樹
懐あ〳〵春秋村中金剛精舎古樹の樹あり四時実を結び
熱すれども緑のいろをうばゝるゞ故ふ春秋の名ハり来て山西ハ
と名づけてさ秋〳〵絶風ハ仏ゝり閑巷を過ること十町ばゝり孫
深とゆれば淺緑斜あ〳〵殘あり村落ふ流れを分てゝひ者
たのあのとゝふ朝日ハ出ふ名ゑ〳〵一顧すれば多戸川の流れ



をぶて〳〵山〳〵ふ入ハ石ふむ七ゝ流れ乃春谷ハひゞきく
人のあ〳〵そひこゝろ如〳〵山河のすゞ〳〵業紳〳〵数里ハ乃ふ
曲〳〵岑ハうゑ丘谷ハあ〳〵ハれさ〳〵ハ間市さ〳〵ふら宿じ〳〵
昔の奇乃姿あり山澤へて頂き示春孝のあとをとゞめ岸崩
くハ乃ハ捕ふの名を殘〳〵往古ふ戦場ハ拡要たゝ陰翠さ
る叢深とあり て煙ハ山〳〵の樵張をゝ乃ち春深〳〵〳〵卅意
巽社礫を埋め月さび〳〵う志〳〵尾花白双のひろをすゞ〳〵接
接紙ハひゞ〳〵て松ハ白雪と霜〳〵梨挑枝をゝれて丘ハ弓
結ハ糸をゝち初蔵〳〵ハ田園ハゝゞけ宝刀むな〳〵懐の
中ハゝゞり花香ハ附を感ずれば奇舞乃業華も夢のあ〳〵り
あ〳〵月ハむ〳〵と志のゞゝきハ移緒ハをゝれ盛衰も紅

藥の色はうろうろまでうつり殺気さく昇平の日景和清く殘
壁は似て雲をあるく人家新をあんべて路は窓のあぎとひを
つゝねかくくるぐるは踏分し数多の乃も衛ごとりにはまくくに形
る迹ありも後成々の比無いとはあるぬ
藥の美を言ひく老宰の滋味をしゝず破れてる温袍を著
く厳冬のさげ者をうとたり射宝を多くたるゝく他の人は
請る者を今の番人まさに有射錄思ふてるるのあれごる
人欲の私きく形ひ必ずの人を謂んも名可あるずや
浴の炊篝菴ハるのむるゝ小松内府の煙籠を造られし和るれば
その名殘丑うとぞ六波羅より東南あるうて小高きところ乱
まあるる附家をつくるてるれあたりを塔るるは并の如きとも

多く出うあがねみゝてるの形丸く左右は園く会せる玉のみ
きとの傍う出さ一尺あまり竹う手が友文孫みゝたるを見うり
古雅いそんるるるく畝くれもゝ往昔の繁華をおりひ世
で今や赤羽毛瑜乃并あるひも外ぐみく造るるのハ
丹波但馬の産ものもさず手が孫父は祖ぐうふむう大
糸みるく男も并をさゝたりをきこころまさに若形しと人作
みて結くつるう結る越へ接ぎさゝるぐまさ塔とも塔ぞ
たり表は家招の如く筋ありて重ねるものと見く内ハぐ
皇室ぐめるう好事乃若求めるゝ手みも弾こもゝぐその窟び
みるめたる人多くも瘡を病る者は浮はハるゝは接でありし
ありは好まさ人あるるの接ひあつめるゝ再びりるの塔は重ねた

ち院より遣しづいと古代のものれあり光人の墓あるしあやとあたる
京師五条坂のたりよりひくき平地あり叢淳と名りて陵ふしあ
べ山より下里より金ハ救歩ふしく親書を火葬したるとつく人
あり名辺邦とふより古老のおがうあり一墓ハ古祠を存
ち弘長二年十月廿日と名りてあるあミ何ろに荊蕀生ひ
名ぶり人跡ことなりむしも一向宗乃つ徒墓碑をこのところ
指来りて埋ろうとやう
誰人の塚といふと名ぬ古墳奇乃中山の八ヶあり鼻血の出
ることきこえハ塚城いのるまうあるず験あり何のむまくもさげて
鼻より血ハ右より流れず左の袴裏を拭り左より出れハ右とふ
きりておすまずあるといり

紹智ろく士明とふ香炉を拾ろく火いけとふして明千法師の
討来られしとりよ出やり明千帥拾つさすりつ香炉をあくれ
たりある射又来りてその香炉を法多ぶとろくヤ三本ハ
ぶあり此名器と何ろく火いけよハ右あるやといハ紹智笑
てやされるハ此器火ハ併ふしく巻ひ偽れぶこと半偽ハ月ある
つきそをしまれ偽る私り香炉あして床まおきうハ左ぶよハ名
ひのたぶのものと云しとぶ此の羽人のうハも角ひくいとあり
ろ〜

高京の雑波や与左ろうと云る遊女屋より演萩といふ左夫あるも
こハ播州高砂の高家おもいつりのく姫ろく人の家ハ姫しけ
るぶろの家衰ぶより及びて夫より拾ろれ親のもとまうろれども

親の家もおとろへ父母を養はんが為に与左衛門が才知
分をうして遊女となり形りの江戸の廓へ移
りしが時に遊女となれりんと十一人の遊女を
こゝに本とす濱萩はその志し弱者あるべず風雅の居まも
うるはしくあれバ見けるあれとうけ江戸よりのぞこて濱萩
ハ与左衛門ゆゑに父母をろとるゆゑ江戸へくだりたきゆゑ親を中
なるゆゑ許されざるゆゑ濱萩ハ害をうゝひ事のよしを歎きなるゆゑ
客豪富のおきゝ人まく彼が孝心我感ずしてやすき賃くるゆゑ
て路費とのこゝあるゆゑ与左衛門ゆゑ親をなるゆゑ費といとゝなこて
れが親ひも安ざるゝあるいくもあげゆゑ引れバ濱萩ハ
こゝをとる使ひつゝ下りゆゑ濱萩勇みの中をとゝうかれバ此の

遊女もこれまあゝひくゝその家繁栄ゝ二人を救多の益を切
たゝ言ゝ言ゝ茶店をゝひ濱萩が親達ゆゑ江戸へ
の濱萩ゝゝあくゝゝ父母をゝ見て
動めあゝも見ゆ親のかゝ形ゝゝ父母をゝ見て廓の中あく
も推まて業をせざるゆゑ孝心あゝんやゝの江濱萩が義勇ゆ
うき人まのをづゝき火葬ゝ那
浮ゆある業人ゆ拒曳せゝれて出業のゆゑ親子三人みくめ
でゝき業ゝと形ゝも孝の恵ゝあゝゝゝのゝ形俊雅波
とゝゝゝ名を使ゝう
幕府使役唐濁逆声ゝく東山川海谷乃深海言卑ゆゑて
その討の家ゆり里言方言ゝゝ変ずゝあゝゝ連書の

移声をすべて正す時は同じく火と風寒さくはひとのこゝひきれど
を五畿内ふくそひイと幸るれり梅花我風来ていることゝ
ごも五畿あてハくこゝうとのすべく紅粉をまくだろうつべきを屋
とゝふことを蒙らくめて稀ふることゝ同じく保ありまハ羽乃祝ごゝふ
ものよハあくず音後の序みてみ北北自然ま出でたる羽あり
五音ゝそよこゝみ五ふ五音の羽ハゝるもあの招本といふをきくゝ
五音も祝よハあくず祝ま四季の内みく清音濁音とゝぶも自
然より出るれり上すゝそ下濁ま自然の通称ま五ごも洗濯ハ
五歳ま下をゝゝゝて唱ふまでも風来みくハすゝそゝこれま
土ハ自然あれバ下濁用の字みごるゝも宣ゝゝ歳ま
大抵ゝゝねつゝ文字ますゝねやらゝゝねずゝもあき半房ごんゝ

兼嘆翁の滑稽ゝ多人の知るところあり一日平ゝもとゝ来り
対ふおゝゝ世人多く茅蕃ま来りて月花のおゝゝ絶ざる中
ゝも崇国院ハ天狗ま多くせみひく撲岐ま崩ゝすゝく菅公霧
ゝ形ゝて筑紫ま飛せられゝとのふをまくとゝのごゝうすゝハ
多くれども実況を詳まゝまるものの一人も多くゝとく歌見せゝ
ある侯十万石を飯くゝ困窮せられゝところ大坂まて素寒の
町人ゝの侯れまゝ多ひすゝまゝすゝく倹約をゝくまゝもゝゝく
家来の孫をゝくゝ諸事の入用を減して上向きゝゝゝ
食くゝゝゝ下ゝゝ子あれまゝくひ形ゝ祐家のつき会ひとも有ゝゝ
ゝれゝゝ家中いゝくゝひゝゝゝ下ゝゝいゝゝゝゝ多ゝ行収鉄盗ゝ
いゝくゝ婚ゝくゝ窮迫ゝゝめまゝ何来ゝの仕法と変ひ

て予まこのことを欲きなるまま予こて云わ本末あり事終始
あり終まずきことを始まして始まいることを先まする射ハ本
末あーきハさらんあーーく善るのうるまを家の経済またる私
欲のうすくーーく孫者あるを若とをけてえうこと流人をあハせて
徹の法を行ぎいるわど国家ーーのつも年を追ふく富さんを改
めいふべきまあるず猶ぎやくーー利をはんとするを民と利をある
ふあり出来を法るといわーーよりーーーー云傳わるるどく寄字の
徒のこをぞへあるまるーーこの文字をとらるときハまを立ん立んとすれバ
下可あるず下可あるんとすれバ上立ず家を治るの法まず接
ドたるをとろと停慶ーーく浮おひーーりさむるを起すべーー十万
石の領中一万石とあきのものーーーーく人九万石を以く家居を

たるをとあるバ一年ハ一万石十年ハ十万石と事やり左のごと
日ーを法めずいことを大名の家計何ぞ町人ハ財を借ることを用ん
やといるぞ案性ーーて久りぬ

予ぎのとふ立夏まつのり賜つる者合あるある方ーー夢る肘人の云
ろハただろり此名器人も知るをろ形を指つる人のーーくいた
く止めるれども妻ーーりやむをとはるれバあり名ふを武家よ
て武具をとるるバ恥辱形れるる衣服をむじめ桑器ハ夢拂さ
まもいさろ家禄といふるるるず井戸無川の名和金器元法が
名器ーりこも民ハ飢渇と救ふの法ーーある諸侯領ハ飢饉
のるき年貢ハ名器をりて窮民とするひーーとありとなりが
たき仁政といり

○

牡丹花肖柏西山ニ居られし時る金を賊ニ奪はれノ歎ゝ山
科の草庵まく業器をとりたる残七年歎と盗人ニ成り去
られしう盗賊ハ金銀と衣彼とをさらに奪ふものなれバ在俗
の人ハ指ゐ有ゝ世と捨たるもび人ハ華美の衣類と金銀を
ハ儲ふべらず家の調ゝ及もあるべきゝどハ土器と紙ばりのこゝ
ひまて渋すべきとあり古れ紙と付ゝ来一代用ゝあるべし

○

弥陀如来観世音菩薩勢至菩薩の三尊ハおのゝ指ゐ信
ずべきを弥陀ハいふまゝくもおく観音ゝ何ゝまをあつく信
んされ信ゝと勢至ばかりハさゝどゝ教するこもゝ多く又
勢ゝとあゝ至する大仏盗ちゝ勢至ハ切使もうたき菩薩
ゆゝ絵と見ゝうこのふ人も希ゝありとおゆされうたれを人また



とゝゝんゝハ美婦人乃恋おきとひとゝうゝ又庶生縁の
うすきう月座ゝのふ仏ゝ出ゝうる仕合セ不仕合セありいたんや
今日の凡夫ゝ指ゝとや

○

一休禅師紫野ゝおゝ寺ゝ人社書をのとゝ好るとのあまゝ
御用人と書てあゝ人ゝ寺ゝ他のとゝとゝ書る若ゝれバ御用
人ゝとゝくゝつも書ゝひ又上ゝ只ゝ一字ゝゝ呉乃用人とゝ
せゝのゝともあゝとゝやいとおゝりゝゝ乃徳すゝてのゝ事ゝふゝよ
ひゝく義理とゝ形ゝりゝ乃ゝ寺ゝもまゝゝれゝあゝひゝく用人乃
二字ゝと合セゝ一字ゝ仮ゝ書ゝるゝ文ゝ云
多度乃ゝ寺ゝず忍ゝゝ義ゝ薬ゝ乃ゝれバ恩ゝひゝゝ寺ゝ
乃ゝれバ恩ゝ仏ゝ仏ゝ

○

て龍ちの龍尾といふ傳あり是を尺く棄恩入宝為志実択恩
術といふ文書より何と形くうよりてをくしと云り
伏見より年十年業ざうある老翁土保人尾器のたゞひを
荷ひて浜中を售りあるくけり常よりあきあふ家より来りて
食るりとすると形ちうの家れ幸ひ人大勢あつまりうれ翁より云
くるもの尾の荷ひてるものハそれ便いうどだりのあるやと問
つぎ翁こたへく銀十匁ゑ家どの荷ゆるゞ〜と云又問家の町
もくへの行ひ繋きところあくこと〜あやまちくこゝか砕くまゞ
きゆれもあく〜波せやうの時よハいゞするやと云ずそれこ銀〜色
ちゆ玉バさるとと形〜とハいふべくさある時ハるのををあり乃
まくよ述く銀ゆ年久〜くゆ高ゆるれゞ壹荷ゞるゆハ情ゆく

○

情更く高ひゆあり〜といふ又問ゆそのうへゆも又砕くゆゞきりのゆ
をあくずその時ゆまさいくゞずるやとゆ〜ゆいゞいくよ問尾ゆ
まとて数ゆれ年ゆもいひゞくゆ五ゞるれ形ちうこ生涯迄のゞく
年ゆくゆりとも我すより外ゆ〜形〜といり
龍神ハゆと法くふよ妙ある術を見く一滴乃雫をりく暴雨我
降〜波涛をも起すといり又人を火とつくふよ妙ある術を見て
一炬の影を加へくいて第ゆを焼すゆ天地の際ゆあるりの八木火
土金水の五つより外ゆ〜こ五より万ゆを生化〜く第数形
容をとゆすゆ龍神の形ゆ術五形れ中ゆのくつふよ妙あり
て外のゆよ術形〜法くれゞるつをあ〜人ハ色形をそれ
くゞゞ尾ゆかつくり是を以く色不及多〜世人火のくを法

○

ふよ妙術ありて金をつくふふ妙なる業をなすべし多くハあり
金のためよりもとに労して身をたすけ若サかるべさあれば火木土水
二九四つのねふのく妙とをなして金を法ふよ技とおぼゆ人こそ
金をつくふを火と法るべしく自在をはるものあるハ生涯をもつ
てあるべくるず

技乐を費あるをよあり費をたぶけハこの〜これ〜勵くを多
益あるものふあるを益をいとふ肘ハおだ〜さくあ〜ありてきハ危
きこころよありてやうきを忘れバれを〜ろきとあ〜半生ハ労
と食さるよりの労せば〜〜食よるを不及あるを命て然を終るこ
とをるべ〜調爲と人身とおれば多〜つ〜ぬ技〜つ〜ぬさるもあく
技ぞりさるをバ患生をるをふ及あきをあるべ〜病を不養生をあ

○

まて世ふ気を為託するこの常よ病おきふあ〜べ
汚ものうるどの大汚ふく痛飲者ふ一睡〜〜精神をぶふ静
むる肘ハ〜て身を技すよいるるず辟く芸ゞ為よ犯されんを
強るを乳まさハ女色よおぼるるゞ為よ精神虚耗して仙術を
破を癈渇胃中よ痼疾とあるるく血を膏取す曳く腎を
やぶるを及べ〜

○

餅ハ食帰するこの外〜多く食べるるず餅ふ食傷〜たるを
殺べき術あ〜ハ病とへ〜福を出すは扉あるるれバ一言
いく智ら〜一言いく不智をす人の表形〜ふよおりハざるを
ハいをべといどもこべるよ忘れざるをいふを心と表義す
何よるべおのすきハ老久のをとあり多くあをたく人指を

禍を招き身を労するの媒形りされば財宝多くこれを生産
をつくり多くをすす八只財宝の多くをんとを好む者あり衣食の落
をくに財を持者只多くつあるを生産のたのしことしく終よ財
宝のあるを身命を亡ふあり欲ふき人は日より足る所ハ夜の寒
の火を見ふおのむくまを形こず

○

浪華の出船は持びしころ農家よて稲麦あり穂を落すも
は床九は如くしく割さる舟を横ふあるべ立てきるといふ具
はうむうよりはうるあるはやあるを古ふ

苅て乾ける田の稲の八束穂ふされをうのるる秋八来よるり
こあるさるといふ村の翁しはぎり見ぎり出秋よ行るく知ぬ
宇治木幡淀伏田あるうハ昔遊女多くあるるこころ所り古き



淀場乃地図ふ小椋姫町とのふところあるるく遊女町あるりそのう
こふ多くく水辺ふ居たるとと古書ふ見えるるうあさ書舟は図あども
おりひあ生尾ぐ

沈田五宋ふ酒生家の豪家るうる平和労あるるく宵ふの湯ふ
しく酒ふ極月は出サるあるりかの五宋を対ハんとやしあるるる世
九日のをあるく家計ふ混雑は財ふれごる五宋平を見るよるいる
ある音まるるひげ形き相聖ふりるく座しきふ猪じ焼りきぐ
のおぐるるしを平をるるしいひ出くるるの板をやく聖ふるて
をよひのおどよる酒食は出りてふしありて宵ハらぐ牙ふ
ぬひるくめでたくこぶ家平を年をむるるるるるるとく板の明ぬるま
でをのぐるる焼るぬさぐ茅卧ふぐしひとやするるしふとて卧

しぬるこゝろ、まで家門より家事の用をあるじゝとへ云来るを、
ひらもあらうき事あれと感じゝ五ぢが風流のこゝろざしを
考ひぬ

○伊勢より伊賀へ越る途中より一人の男いろ〻考
来りていふやうこゝ五ぢ大坂の若ものなるこゝ五ぢ餓鬼よ所う
ものこゝもや飢てひとしきもをこゝ中さゞ大いよ難渋よおもゝり何のあり
とも食類の所持せあるぎおかしゝもみりかてゝとのこゝ事ん
ほぬをとゝ中ものかとハ世りこゝ食類のこゝをんも考れ
お刻こゝ昆布のあるゝをこれあるもよろゝきみやとこゝせける
ふ大いよろおびゝ歩に食ゝこゝうき事同餓鬼のつゝとゝ考
うるこゝのあゝあるこゝ云月あハ見ねゝ世あこゝ

ふ限らずこゝろゝまて気食ふゝ餓死ゝたる然名のこゝろ
ま殊更ふやゝ考れ食餓鬼とありて歩行の者よこゝ所行る
ありこゝ五ぢよりこゝる肘も病中ゝきこゝ飢ゝ身よ気力ふ考ゝ歩
行も出来ぐさきこゝ考れこゝ五ぢ形ゝ世ゝ此ものの業様と商ひ
場ふふ沒又をこゝりよ洗ねゝ搗りのこゝせゝとゝ世よハさやう
のこゝもあゝこゝものよや化日搗ねゝふかゝ乃伝よ考ねゝこゝの
伝中ゝこゝ考れ考軍のゝこゝ伊縁ゝ餓鬼ふ洗ゝ考ゝこゝ
ありよ考ゝ法国行狩やゝこゝハ食事の肘よ飯をゝゝづ
元りおきこゝ考と紙ゝ人ゝこゝて扶よ入れ五餓鬼ふゝこゝ考ゝ肘
考ゝ考ゝ考ゝ形ゝこゝりゝ人ゝこゝこゝこゝ考ゝこゝありける
ゝる形こゝハ医ゝ考れ招要ふゝ人の形ひこゝいゝゝ油ゝこゝ

よつづのすまこづうつ四つ時ゆ和よりしくよろつぬとい出て来る
ゆり寄しくゆ空き射ま風邪ゆとそうきれぬものあり空きこの内
るとこうる射ゆ邪気ま感冒すうるあく初ゑぐしこまきさいあるる
ゆ四つ時ゆ射ま和やゆ大要のきざんとゆふぐしゆ邪ま気のゆ
るむどきゆうるありされば和事とゆうざるゆ大事の始とゆうる石
ゆぐしゆ吉あり

かぎうのとふうゆ世のあくひぐとゆうゆ凶果ぐうゆ形しき
あうゆ人吉田織アより伝へうるゆ和ねつうぐといる香合ゆも初うぐ
さもあき器和の中ゆおぐつうゆ良高人ゆ伝へこの数ま拾
ゆ吉拾ゆぐあり又ゆけしゆ買ゆ九ぐして又ゆうるゆ多しの南
人和又つうゆまこうれ月初すうゆうち大坂豆動吉として月のまうる

この此香合と又しくゆ中ゆうるゆこの和よろしきかのしく初りのひく
うくゆ義未ゆしゆのゆまさ初りのゆざるゆやゆまこうゆ織アのゆ
ねつうぐといふ香合ゆりゆ和ゆこれのしく買ゆやしくうゆの他ゆ
和ゆはよの人しくとゆかしくをしゆてしく他ゆ和ゆはさうゆ人ゆうけば
さくこれゆまうゆいよしく参拝ひゆふよやゆ一鹿のおんこうゆとれ
ゆうしくとゆふゆいよしくうう拝ゆ和ゆしくいぐゆさあうぶ百ゆうゆ中ゆう
ぐしくとゆ買ゆりて吉ゆへ拾ゆ行しく子両ゆ夢ゆりるゆぐゆ血ゆいかき
あき人いゆ殊様ゆ和ゆをゆる

人世の浮沈ハ常ゆしく盛ゆうゆ初りぐおゆう人衰つゆる者又
きうゆるゆ常ゆのゆうゆるゆまぐゆおゆう人ゆる者ゆ蔭しおゆふ
せざるゆれゆりゆ和ゆすゆてこゆ浮む涙をあれゆ空ゆ上人ゆく

をつるハうべあるべし〜 大江何某といふ人九万あまりあまる弟上臣
高〜〜く好みを惜まず命こゞろ魚とあきなひ荷ひあるきうる
知る人の方をめぐりて今より五月魚あきなんあるべき日ぞとふ
まゐ〜ひぞひとよ引うの子どもをもれうとてこゑまで美服
あ〜〜ゆりうる筆の象へ法ぐれの容ふ〜たのゝ形ばれぞ人ゝそ
の志〜とあれこれ感じく魚屋世ひまふさんあて天満ふる
何の業ゝ〜今現よりの象お猶〜〜う常よりの大江業のいひけ
るとよ金銭をきまこれくまうゝきれいよつゝぶ〜こ世ふいぶる
象ハさよあゝずきれいよまうけて又きまいふ法ゝふあり紙をめ
梳よあゝぶ〜化の器よ人ゝるもゝ含すのにんあゝゝ屋ハ廁ふあ
まゝ〜ハさもあゝおゞめ丑ぶ化のゝゝろよ何生ぞいゝ〜むさくき



たゞ〜人の弟れ上をこれと同じゝとのうこの何を考子ハそのゝ
こゝろを失ぞるよあゝゝいふ強よ符合せり
あるあのまゝの書屋候弱をまゝゝ〜西を見るおゝゝを用
の役れ者きを者ゝる射足軽の紙る可十人あゝゝるを六十家と
〜〜ゝ足ゝ〜〜と拝後一変〜〜ゝる射を考乃何のふやゝハ六十
人の若よハ服をつゝゝ屋やゝと考ねらゝふ何のゝ〜形ゝとまゝふ
そのあれゝるハ猪牙あゝゝまゝ表親妻子ふあるをのものゝまや
と何やゝれ〜よあゝゝ中屋やゝ何丑も親も妻子もあるものよ
ゝれとゝ中ゝ丑ゝさあゝバ時をつゝゝ〜形ハ大勢のあれゝゝふ踊
阪よまゝゝ〜ゝきハおゝきふ形ゝ〜庶ハすゝあきよゝゝ〜
今大牙の内よハ方石ちゝゝ元るものもあゝゝ〜ゝ丑)を二三人

脈とろうゝあぞまのあるうゝ三百石ぢうの身分あるゞゝと金
出ゝれゝにより〳〵その後ハやうゝとぞ良者ハ仁心もまゝうん
うゝざるとゝ人〳〵中あつぬ

○

河内の業先といふところうよ一年ゝど居る時常ふ麦飯のゝ
食ひゝ〳〵ゝ年ずゝ食ようゝゝゝゝんとする時初めひるハ日業ハ
菜飯を食ゝて法を重卿郷地よすゝ親書ハ我の出ゝかよ
ありて仰義の恩をゝふ弘通の儀ハ身を捨下石上ふおきて業
食をもいとまゞ年ハ者ゞゝの義ゞもゞ業食よ怪ずゝゝ四
らんことをおとふのこゝろざゝいと捨〳〵仏御乃ゝゝゝざることゝ
こゞゝゝ病ひたり
犯法の罪よ名聞之ふあり八代焼八代密相合鼎ありこの中



○

合鼎乃接ぢたゝゝ時ゝ何糊ふゝ附てもたゞ飯一碗と
加へてよゝねゝゝ後ゝ時八ふゝとゝ形〳〵とゝ
藤鉄の業ふ乃持ゝるを黒焼ふゝ胡麻の油ふ和〳〵たゝ人ゝ
〳〵金瘡切り病ゝゝいゝゞのをゝ病ゝゝ洗ゝゞふ食ゝて
妙ふり指三成ゞ家の法形〳〵て左角大扇のあゞゝゝ結
ゝゝ年ゞ皮中振弦決命といふ力のゝ痕ふよりて切れ〳〵時ゝ
さゝゝすぢゝの病ゝこの業をつけゝゝ忽ち全快ゝ

○

遊女町をゝゝふゝ文字ハ上八と書ゝゝ不得孝悌忠信礼
義廉恥の五を上ふより此名ありと云説ありされども遊女町ゝ
ゝゝゝゝ中ハ孝悌のゝゝゝゝ年〳〵ハ主人よりゝ法
人忠を尊〳〵てゝの家を起さを信を以ゝかせける客いゝゝ

らひてやうの人を抱うず義然を推しく初俄をこぐさぐる
附ところきまあくざまずなぞ上八といちんや実八嘘の裏まありう
が主女といでる人情八ひくちくべきものハこやふ扶衣のまねぎを
いすめつくくあれ設ふまずあるがち孝將患信ふしとそい
ふ爲ろくず

○

駅ろくちの風俗八さくふもいさぐ衣被調ふ不ふまく時く
乃流りまきくのくちふくいさくのいぐひハあれど又ところ
さふまくれりされバ先つも出やすくおとも戻りやすき中ゆく
ふ居ろぐく烟草とふものむくく南蛮より種を伝へく系朝ふ
流行すると浮一ひび強くふくりくをふくび流りくて都鄙と
もに歌ふと好り火れるちあくを侍止とあまたれども

○

人情の好こやめがくくてやくもくきくも品よくくとこふありぬ
それ医のとふやありくん浪まる落書あり
止たきハ八象のあ一贅半力法師のたぐまえ伯乃医者
弔ふいとけおき射までも忍び揺灯とふふこれあくく半人の拓
用ふ者のびて拍行おどせらくく形ども揺灯ま習くる紋を
者るくくこるせくがるの車流布くく徒ありくくり紋をつけざ
る者ふくこれハくくくくくまるの人ふくを者ふまずき為の用をあり
くくされバ八々武家ま限ろぐく旅ま紋と深ふ幕ま紋をつくる
八祇園と知くするこふ有り農人町家まぐくも今八紋ありく宮
紋のあくそひ花までをもくまより農夫商賣ふどまる紋八ふきを
づあり羽織といふものハ乃被ふくく初被まあくぐこれま紋をつくる

ことはいよ〳〵いとれ形〳〵と世ひぬ世の中はうぢ形あり さる多くハ
こゝかゝくの如〳〵

○都舎は住める者ゝ美彼と者〳〵美味を食〳〵て尾普の家は
起臥〳〵所田舎は農ゝ足ちゞゝハ雑彼雑食を常とし〳〵むさく
ろ〳〵きあは住むも生産人の果報乃身はさかさる雲泥のおも
第れども米を低る農夫米と言ヤ〳〵絹を織る婦人絹と美〳〵
耕牛霜食あく〳〵倉蔵余振あり第ゝ分ハ已ホ立ゝといとどこゝ多
衣食は人あはおのづゝいそぐふ〳〵
風情はこゝかさよりむゝへるれうれむふより足すゝさゝばむゝふは
あゝ〳〵家方はあ〳〵とおりへゞゝ是はなりてあさむゝふよあ〳〵
あづめやる雪の山路は朝がゝけ何とゐとぬる一家乃ぬ〳〵

○月見はいづれバ見ては隅ふて来るかげ法師あり故ハ見ば新ある
孔人のうげあるゝと同へゞ返しさる事ゝく
家つげとられどもやふ世の人ふものいふ品をかゝ家法師
○ある人手ゞゝとふまりて絵は魂をゝゝと手をハいゝやう形るを
と〳〵て垂き絵れバ魂をゝりはとゞと同ふ手ニゝへゝゝ言すづく
絵はハゝきゝゝば何をみても実人をこあてさへ我さバたゞ〳〵るの人
らずとゝふ和あるゞゝば他のをハいざゝゝず絵は魂のゝゝるとお
りふを法ふて推ゝ名垂も多ゝる中は家見〳〵家和方はは一
垂ちと三精舎ありこのちゝ子は利休もゝばゝく居ゝま〳〵時
和好きを求〳〵て庭園座〳〵きゝ五畳をどをゝり一間は持の板一
本と名ゞゝり一間は卧〳〵ゝる鶴二十五羽ぞゝりを名ぎきてゝり

いづれも彩色ありて古法眼元信の筆といひ伝へしそのくさこの
絵をうける画師この寺に居すること三年ばかりの中に何ひと
つ画ことごとく碁とこの二ツ只それのみ日毎乗こころ〳〵
あるべこころ〳〵遊びあるまやくこをと絵うりばかり茶
をとり〳〵とおきいつまんぐる老ふかとおりひくあるとき
但指のやされるハその許画をとりて一家をかやりといひかく〳〵
茶とえりとるとも〳〵囲碁よのこ年月をるさるハいつかや
家衣食の費をいとふよハあるねど何ぞへかりこもあそびまへ君
老もあ用ありて亦へのかりとよりてハ一年も在京せんもいつ
がく〳〵いつよ彼画師きくてそれこそと名弥をきとあれへさ
あるバ年末の恩誘よ何ひかりかく〳〵の画をのこるあるすぐ〳〵して



ふのがまへのこふく又四五日ばかりよるる但指も何とぞ〳〵こと見ることて
絵ぐも絶て茶とこと〳〵ぐあるる小切をの但指ぐ居るよ松ふけく
来りひそろまやうく〳〵こふ彩をひくそと祝きて画師のあるき
まを見まへときやきるるやぐく小切をまいぐるハれて画師ぐ居
るをとぐ〳〵ふよ明り俵子の掃板よ牙をよせてさぐ〳〵れ考とうつ
麻起するあるさを見るまりを小切をと引よせこよりく〳〵のぐぐつく
ずたやく囲せるとくそのあ牙も麻るふくうあ金でを画師ぐ
きろよ起きいで一百ばかる但指ぐ居るるの鶴ふ
画勢石見ふく〳〵丹毒乃ぬいぐるくずさあるまよ又の松ハいう
あとうぐろよ前のぐく松もすぐ〳〵麻ずく〳〵あけるばう〳〵や画ん
とやせんうやあく〳〵ぐ拵り法ぶやきつく〳〵て囲〳〵ぬれバ但

持もたぬ絵にてありしが十日あまりありてその鶴およそ廿四五
羽どもなりしことを聞きつけて覗き見るに二つびは附をそろへ足を
のべ手をひろげてつる鶴のかたちなるを見て臥たるに聞きつけてう
の画師がもとに住持来りていふ名がきなる鶴の姿はさやうに
やらめぬものとよべ覗き見たる姿のさまにてありしが又もけしは折おどろ
き禅師にきめ画がきしとかひのありしをちやくも悟りあらは
いかに知りなばいふを問ふにいやこは昨夜その鳥は立ちやうすをそ
とらひとつ知りたりといはず画師それよりしばし一段は名がき沈し
て杉戸の画に檜木一枝を画がきたるにその檜木を画
がきし後東山へ下向の折から東洞院の箱根の山中にて檜の木は
枝のみなるかひらあり見はべりぬ東山へ来りてかきずしてかんたん



名物一枚ちりは立派しるき住持みて大いに驚きろきしく東山へ行かせて
方丈にて又わや来られしふいふあるをあのといふにさきくて画がきし檜
の木は枝ひと枝見えぬこころあり箱根にてその絵を陽られども
さし言をどりたるとて一枝をうきたへいふ多ごひしていかゞ去りぬ
こらぐ画子魂をかよはすといふものかなとおもひぬといふぞある
人も感じらしきかりぬ

雲萍雑志巻之三

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan